

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	臨床心理士による心のケア事業				
開始日	2011年4月1日	終了日	2012年3月31日	日数	366日間
団体名	特定非営利活動法人愛知ネット				

総額（税込）	9,420,000円	スタッフ人数	運営3人、専門家3人
--------	------------	--------	------------

事業目的	被災者が「自分たちの存在が社会から忘れられていく」と感じないように、長期にわたり被災者の近くに存在する専門家（臨床心理士等）を派遣し、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を予防する。
事業背景	東日本大震災にて甚大な被害を受けた地域では、肉親を失ったり、津波で家が流失したりして心理的に影響を受けた被災者が数多くおり、長期にわたって被災者の心に寄り添う心のケアが必要とされている。特に、小中学校及び高校の教諭らが、心に傷をおった児童・生徒への対応に戸惑いを感じており、児童・生徒の心的外傷後ストレス障害（PTSD）対策についてのニーズが増大している。また、子供の親への指導、対策も急務である。 それらニーズに対応するため、避難所及び仮設住宅への巡回カウンセリングを実施、また、トレーラーハウスを活用してカウンセリングルームを開設し、特にメンタルケアが必要な被災者へのカウンセリングを行う。小中学校及び高校の教諭や子供の親に対して心的外傷後ストレス障害（PTSD）対策についての勉強会などを実施する。事業全般にわたって、岩手県大船渡市や地元NPO、教育関係者、また地元の臨床心理士や精神科医等と連携して、継続してケアが可能な体制を構築する。
事業内容	<p>コンポーネント① カウンセリングが必要な被災者の早期発見とメンタルケアの推進 岩手県大船渡市災害対策本部に編成された心のケアチーム（NPO等8団体から成る）に参加し、避難所及び仮設住宅における巡回カウンセリング及び学校教員や子供の親への対策指導や勉強会の実施を行う。当団体派遣の臨床心理士が交代でカウンセリング等にあたる。</p> <p>コンポーネント② カウンセリングの必要な被災者へのメンタルケア。必要とあれば精神科の医師への紹介 上記心のケアチームのもと、岩手県大船渡市リアスホール（市民文化会館・市立図書館）にトレーラーハウスを設置してカウンセリングルームを開設し、カウンセリングを行う。当団体派遣の臨床心理士が交代でカウンセリング等にあたる。</p> <p>コンポーネント③ 地元専門家（臨床心理士・精神科等）との連携と協働 岩手県内の臨床心理士・地元有資格者と協働</p>

2. 事業の評価（評価者：藤森和美／武蔵野大学教授）

最終評価実施日：2012年4月23日（月）

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

【コンポーネント①】

- 2011年4月1日より避難所での活動が開始できており、いち早く被災者への支援が実行できていることは評価できる。もともと当該NPOが通信サービスの仕事を行政と連携していたことが信頼関係の基礎となり、活動の開始も早められたということである。
- 一方で、初期の段階では避難所に不審者の出入りがあるため、NPOの受け入れが難しかった点も報告され、安全で安心できる活動団体と認知されるための努力が求められたようだ。

【コンポーネント②】

- トレーラーハウスを被災地に運び込むための苦労はあったが、ライフラインが確保されていない状況では、非常に良いタイミングであった。

【コンポーネント③】

- 地域の行政機関、他の団体との会議に出席し、情報を共有できた。医療機関や、心のケアチームとの連携も早期から積極的に試みていた。

(b) 有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

- 避難所で生活する被災者の心理的、物理的パーソナルスペースが保たれないストレス状況で、臨床心理士の地道な活動から始まり、仮設住宅に移転するまで被災者に寄り添い話し相手になる目的は達成できた。

【コンポーネント②】

- トレーラーハウスは、被災者の個人的な相談を受ける場所、子どもたちが遊べる場所、統合失調症の自助グループの場所として有効活用された

【コンポーネント③】

- 事業内容面も協働ができ、出口戦略を常に意識しながら、問題を抱え込まず地域の適切な資源にケースを繋いでいくことに成功していた。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

【コンポーネント①】

- 臨床心理士に対する認知度が乏しく、何でも屋として多様な依頼があったが、役割を整理し各専門の領域の方にリファーする努力を行った。時間経過とともに、関係性が築かれ被災者の理解が得られた。
- 養護学校への支援では、教員に対する臨床心理学的な視点での支援が非常に役立ち、障害を持つ子供への対応改善に高い評価を得た。

【コンポーネント②】

- 初期の段階では、場所を確保する点においては有効であったが、コスト面を考えると事務所を借り上げる方がランニングコストなども含めて安価になることが分かった。
- 被災地では電力の確保が難しいため、今後トレーラーハウスで自家発電ができるようなシステムをトレーラーハウスを造る会社に提言していきたい。

【コンポーネント③】

- 日頃の連携が必要であり、行政機関同士の連携と異なり、NPO と行政機関や NPO 同士の連携を今後も続ける必要がある。
- 1年間という長期の活動によって信頼を得た活動ではあったが、臨床心理士の心理的、体力的負担の軽減を考える工夫が必要であった。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

【コンポーネント①】

- 当初から1年の活動と被災者に伝え続けたため、終了に関しては理解を得られている。

【コンポーネント②】

- トレーラーハウスはレンタルであるため返却することになっている。

【コンポーネント③】

- 関わったケースのなかで必要なケースは、地元の機関や組織に引き継ぎがなされている。ヘルプレスのケースで、行政サービスからもれた人々の発見や引き継ぎが、丁寧に実施されている。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

【コンポーネント①】

- コラージュ療法は被災者の評判が良く、作品を持ち帰り、仮設住宅に飾るといった人がいた。

コラージュ療法は侵襲性が低く、楽しみながら参加できるアクティビティで、大人にも子どもにも適応可能であった。

- 被災地での研修もなく、初めての体験での手探りの活動であり、さらに現地でスーパービジョンが受けられないことは、支援者としてのストレスを大きくしたのは事実である。

早期活動は大事だが、支援者の心身の安全を考えるプログラムを丁寧に組むという課題が残った。

【コンポーネント②】

- タイミング良くトレーラーハウスを設置できたため、統合失調症の自助グループが震災で頓挫しかけていたところに活動場所が提供され活動を再開できたことは非常に評価できる。

- トレーラーハウスのコストや電力の問題は、今後の開発課題として指摘できる点で大きな収穫であった。

【コンポーネント③】

- 被災地において、臨床心理士の認知度が低いことが判明したが、アイデンティティを保ち活動を継続することで、他機関との連携が成功した。今後は、他職種とチームで活動することを課題としたいということで、臨床心理士だけで活動することの限界も明確になった。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

【コンポーネント①】

- 全国の臨床心理士会の活動開始には時間がかかったが、NPOでの活動はフットワークが軽く、早期に被災地に入れた。

【コンポーネント②】

- トレーラーハウスの長所と短所が、実際の災害現場で検証でき、今後の災害地活用に適したものを開発するための情報が得られた。

【コンポーネント③】

- 元々災害とは別の活動が行政の信頼を得ており、今回の活動の基盤となっている。数多くのNPOが活動する中で、被災者や地元行政といかに連携するかという良いモデルとなったと考える。

3. 評価者の所感

活動全体は、その中核を担った二名の臨床心理士の多大な努力の賜であろうと推察できる。内容は、PTSDの予防というより、被災者のメンタルヘルスの向上や、相談相手という精神保健活動として位置づけられる。被災地での活動は、歓迎されることから始まるわけではなく、理解を求めるところからのスタートであり、その苦労は多大であったと推察する。臨床心理士自身の報告でも、他職種の専門領域の細分化が今後必要であるとあったように、バーンアウト、二次受傷を防ぐシステム作りが重要である。

災害支援に特化した精神保健チームでさえ、そのチームワークの維持、個々人の健康保持、外部機関との連携は非常に気を遣い、慎重に行う作業である。今後のシステム作りに期待したい。